The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 大阪方言における準体助詞ン ・ノ・ノン : ノンの分布を中心に |
| Author(s) | 野間, 純平 |
| Citation | 阪大社会言語学研究ノート. 2014, 12, p. 23-36 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/36120 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 12 号（2014 年 3 月）24-36

# 大阪方言における準体助詞ン・ノ・ノン

## ―ノンの分布を中心に―

野間　純平

【キーワード】大阪方言、準体助詞、ン、ノ、ノン

【要旨】

本稿では、大阪方言の準体助詞ン・ノ・ノンを取り上げ、これらの使い分けについて記述する。これら 3 形式の分布は、ンを基本として、撥音の直後のみノとノンが使用されるという音韻的条件で基本的に説明できるが、特にノンはそれだけでは説明できない以下のような分布を示す。

① どの用法であっても、過去形に後接しにくいという性質は共通している。

② 準体用法であれば撥音の直後でなくてもノンが使えることがある。特に、形容詞の非過去形とは相性がよく、ンよりもノンのほうが使いやすい。また、多少不自然にはなるが、過去形にも後接できる。しかし、コピュラの連体形「ナ」には後接できない。

③ ノダ用法では、形式名詞ではなく、終助詞的な使われ方をする。そのため、形式名詞として解釈されるおそれのある「ノンヤ」はあまり使われない。特に、WH 疑問文のみで使用される「ノンナ」は、形式の面でも終助詞的な性質を示す。

④ 接続助詞の用法ではノンは使われない。「ノンデ」「ノンニ」という形はありえるが、どちらの場合もノンは形式名詞と解釈される。

以上のようなノンの分布は、過去の記述と一部異なっており、汎用的な準体助詞から形式名詞へのノンの位置づけの変化としてとらえられる。この変化には準体助詞の変化、特にノダ用法における文法化と密接な関係があると考えられる。

## 1.　はじめに

大阪方言には、標準語の準体助詞「ノ」に相当する形式として、以下のようなン、ノ、ノンの 3 つの形式を使用する。

(1) 昨日食べたンまだあった？

(2) いらんノ持ってくるな。

(3) もうちょっと大きいノンちょうだい。

これら 3 形式はいずれも標準語の「ノ」に置き換えられるが、3 形式間でいつでも置換可能というわけではない。例えば、(1) のンはノやノンに置き換えにくい[1]。

(4) 昨日食べた｛ン／*ノ／?ノン｝まだあった？[2]

そこで、本稿では、大阪方言においてこれら 3 つの形式がどのように使い分けられているか

1) ただし、ノは標準語と同じ形のため、内省がゆれる可能性がある。

2) 本稿における例文はすべて作例であり、*は文法的に不適格であることを表し、?は不適格ではないまでも、不自然であることを表す。

を、筆者[3] の内省をもとに記述する。

本稿の構成は以下のとおりである。まず 2 節では、本稿で扱う「準体助詞」の範囲について説明する。3 節では 3 形式の使い分けにおける基本ルールを記述し、続く 4 節ではそのルールに当てはまらない場合について記述する。5 節では、それまでの記述をもとに、準体助詞 3 形式の使い分け規則が意味するところについて、ノダ相当形式の文法化という観点から考察する。6 節はまとめである。

## 2.　本稿で扱う範囲

日本語学における「準体助詞」という用語は、一般的に次の例文（5）と（6）における下線部の「ノ」に当たるものを指すことが多い。

（5）私が買った<u>の</u>は辞書だ。　　【モノ準体】

（6）私が辞書を買った<u>の</u>を知っているか。　　【コト準体】

（5）の「ノ」は、特定の名詞の代わりをするものである。一方、（6）の「ノ」は、（5）と同様に動詞に後接しているが、その働きが少し異なる。（5）の「ノ」は特定の名詞の代わりをする代名詞として機能しているが、（6）の「ノ」は、直前までの部分を名詞節としてまとめる働きをしているのである。そのため、（6）の「ノ」は基本的に特定の名詞に置き換えられない[4]。本稿では、このような 2 種類の「ノ」を、準体助詞のそれぞれ異なる用法ととらえ、例文の【　】内に示したように、（5）のようなものを「モノ準体」、（6）のようなものを「コト準体」と呼ぶことにする。そして、両者をまとめて準体用法と呼ぶ。

以上のような「ノ」に相当する形式を準体助詞と呼ぶことが一般的だが、本稿では、その準体助詞に由来するとされる以下のような表現も記述の対象とする。

（7）私が辞書を買った<u>の</u>だ。　　【ノダ】

（8）晴れている<u>の</u>で洗濯物がよく乾く。　　【ノデ】

（9）晴れている<u>の</u>に洗濯物が乾かない。　　【ノニ】

（7）の「ノ」は、「ダ」が後接しており、組み合わさって 1 つのモダリティ形式「ノダ」を形成している。これは単純に「名詞節＋コピュラ」と解釈することはできず、特別な意味を持っている（田野村 1990、野田 1997 など）。したがって、「ノダ」でひとまとまりの形式として扱われるべきものである。本稿では、このようなものを「ノダ」と呼ぶ。

（8）と（9）は、接続助詞「ノデ」「ノダ」を形成する「ノ」である。日本各地の方言における準体助詞を調査した大野（1983）はこれらを扱っていないが、準体助詞から派生したものとして考えられる（山口 2000、彦坂 2006 など）ため、本稿の記述対象に含める。

以上、簡単に説明してきたが、本稿では、以上の「ノ」に当たる大阪方言の形式を記述対象とする。ただし、「ヤツ」「ブン」といったいわゆる形式名詞は対象としない。

---

3）　1987 年生まれ、26 歳男性。現在まで大阪府八尾市に在住し、外住歴なし。

4）　置き換えるとしたら「コト」になるが、いつでも置換可能というわけではない。このことについては、坪本（1984）、工藤（1985）、橋本（1990）などを参照。

## 3. 基本的な分布

ここからは、大阪方言の準体助詞ン・ノ・ノンの 3 つの使い分けのルールについて記述していく。本節では、まず基本ルールとなる分布規則を記述する。以下がそのルールである。

（10）準体助詞分布の原則

大阪方言の準体助詞は、基本的にンを使用し、撥音の直後の場合はノおよびノンを使用する。

つまり、大阪方言の準体助詞はンを基本とし、特定の音環境において異形態であるノとノンが使用されるということである。以下の例文は、ンが使えてノとノンが使えない場合である。なお、ここでは、（10）の規則がそのまま適用できる場合について述べることとし、それに当てはまらないものは次節で述べる。

（11）昨日買った｛ン／*ノ／?ノン｝まだあった？

（12）私が辞書買った｛ン／*ノ／?ノン｝知ってる？

（13）今日は辞書買う｛ン／*ノ／*ノン｝ヤ。

（11）はモノ準体、（12）はコト準体、（13）はノダの例だが、いずれも直前の音は撥音ではないので、ンを使う。

だが、直前が撥音の場合、「*ンン」という音連続になってしまい、ンは使えない。この環境において、直前が撥音になるのは、主に 2 通りある。1 つは、次のように動詞非過去形の語尾の「ル」が「ン」になるいわゆる撥音便形に続く場合である。

（14）なんでもええからある｛ン／*ノ／?ノン｝持ってきて。

（15）なんでもええからあん｛*ン／ノ／ノン｝持ってきて。

（16）今日補講ある｛ン／*ノ／?ノン｝聞いた？

（17）今日補講あん｛*ン／ノ／ノン｝聞いた？

（18）あ、今日補講ある｛ン／*ノ／*ノン｝ヤ。

（19）あ、今日補講あん｛*ン／ノ／ノン｝ヤ[5]。

（14）と（15）は対になっていて、準体助詞の直前の動詞が、（14）では「ある」だが、（15）では撥音便形「あん」になっている。撥音便形でない（14）では、使えるのは基本的にンのみだが、撥音便形になっている（15）では、逆にンが使えず、ノかノンを使う[6]。コト準体の（16）と（17）、ノダの（18）と（19）についても同様で、音便形の直後ではンが使えず、ノとノンが使われる。

準体助詞の直前が撥音になるもう 1 つの場合は、動詞否定辞「ン」「ヘン」が直前にくる場合である。

（20）どれでもええからいらん｛*ン／ノ／ノン｝ちょうだい。

（21）ちゃんと食べへん｛*ン／ノ／ノン｝は体によくない。

---

5） ノダの場合、撥音の直後では「ネヤ」という形式が使用されることが多いが、「ネ」という形式は準体助詞として認められないため、本稿では考察の対象外とする。詳しくは野間（2013）を参照。

6） 上記の非撥音便形の例文においてノンの適格性が「*」ではなく「?」になっている点については、4.1 節で後述する。

（22）あの人全然食べへん｛*ン／ノ／?ノン｝ヤ。

（20）は「いる（要る）」に否定辞「ン」が後接した後に準体助詞が後接しているモノ準体の例で、（21）は「食べる」に否定辞「ヘン」が後接してさらに準体助詞が後接しているコト準体の例である。撥音便形のときと同様に、撥音の直後ではンは使えない。なお、（22）に示したように、ノダの場合、ノンが少し不自然になる。このことについては、4.1.2 節で後述する。

以上のように、大阪方言の準体助詞ン・ノ・ノンの分布は、（10）に示したように、ンを基本とし、撥音の直後のみンが使えずノとノンが使用されるというふうにまとめられる。しかし、この原則だけでは説明できない場合もある。そこで、次節では、（10）の規則に当てはまらないものについて述べる[7)]。

## 4.　原則に当てはまらないもの

前節で述べたように、大阪方言の準体助詞ン・ノ・ノンは、ンを基本とし、撥音の直後にノとノンが使用されるという分布の原則がある。しかし、それだけでは説明できないものも存在する。本節では、そのような例を取り上げ、どのような規則が働いているかを明らかにする。

原則から外れる例は、ノンに関わるものと、ノデやノニといった接続助詞に関わるものの 2 つに大きく分けられる。以下では、それぞれについて述べる。

### 4.1.　ノンの分布

本稿で取り上げている 3 つの形式ン・ノ・ノンのうち、ノンは少し特殊な振る舞いをする。ノと同様に、撥音の直後に使用されるのが普通だが、ノと完全に分布が重なるわけではない。例えば、3 節で挙げた（14）や（16）を以下に再掲する。

（23）なんでもええからある｛ン／*ノ／?ノン｝持ってきて。　（（14）再掲）

（24）今日補講ある｛ン／*ノ／?ノン｝聞いた？　（（16）再掲）

（23）はモノ準体の例で、（24）はコト準体の例である。どちらも準体助詞の直前の音は撥音ではないため、用いられるのは基本的にンである。しかし、大阪方言としては使えない（標準語的になる）ノに比べて、ノンはまだ許容度が上がる。

また、たとえ直前が撥音であっても、ノダの用法の場合、ノンが使いにくくなることがある。3 節で挙げた（22）がそれに当たる。

（25）あの人全然食べへん｛*ン／ノ／?ノン｝ヤ。　（（22）再掲）

（25）において、準体助詞の直前の音は撥音である。したがって、ンは使えず、原則どおりだと、ノおよびノンが使えるはずである。しかし、この場合のノンは許容度が下がる。

以上のように、ノンの分布に関して、撥音の直後で使用されるというのはノと共通するものの、異なる部分もある。以下では、このような（10）の原則から外れるノンの分布につい

---

7）　なお、次のような名詞に後接して「のもの」に相当するノンは、連体格助詞「ノ」に準体助詞「ン」が後接したものと分析できるので、本稿では扱わない。

・この本はおれノンや。

て詳細に記述していく。なお、以下では（23）や（24）のような準体用法と（25）のようなノダ用法に分けて記述していく。

#### 4.1.1.　準体用法のノン

既に（23）や（24）に示したように、たとえ撥音の直後でなくても、ノンが使用できる場合がある。これらに共通するのは、このノンが準体用法で使われているということである。

さらに、ン以外にノンが使える、というのではなく、撥音の直後でもないのに、むしろンよりもノンのほうが自然であるという場合さえある。それが、形容詞の非過去形に後接する場合である。

（26）もうちょっと大きい｛?ン／*ノ／ノン[8)]｝ちょうだい。

（27）こんなに寒い｛?ン／*ノ／ノン｝知らんかったわ。

上記の（26）や（27）においては、ンも使えるが、ノンのほうがより自然である。このように、準体用法において、撥音の直後以外の環境でもノンが使えるのは、ノンが 3 形式の中で形式名詞としての性質をより強く持っているからと考えられる。つまり、ノンには（10）のような音韻的な規則がベースにありつつも、形式名詞として解釈できる（あるいは、するべき）場合であれば、（10）よりも形式名詞であることが優先されるということである。ノンのこの性質は、ノダやノデ、ノニの用法で使われにくいことと関係する。

しかし、準体用法であってもノンが使えない場合がある。上で述べたように、形容詞の非過去形にはノンが後接しやすいが、形容詞であっても、過去形になるとノンが使えなくなる。

（28）こないだのあのおいしかった｛ン／*ノ／*ノン｝また食べたいわ。

（29）前に来たときも寒かった｛ン／*ノ／*ノン｝忘れてた。

（28）はモノ準体、（29）はコト準体の例で、それぞれ形容詞の過去形に準体助詞が後接している。文の構造は（26）や（27）と同じだが、形容詞が過去形になるとノンが使えなくなる。

では、ノンは述語の過去形に後接できないのかというと、そうでもない。以下のように、動詞の過去形に後接することも、少し不自然ではあるが可能である。

（30）昨日買った｛ン／*ノ／?ノン｝まだあった？　　（（11）再掲）

（31）私が辞書買った｛ン／*ノ／?ノン｝知ってる？　（（12）再掲）

（30）はモノ準体、（31）はコト準体の例である。いずれの場合もンを使うのが最も自然であるが、ノンも使えないことはない。つまり、同じ過去形であっても、動詞の場合と形容詞の場合とでノンの適格性に違いがあるのである。

このような、接続する述語の品詞による適格性の違いは、何に起因するのだろうか。ここ

---

8）ここでノンが使えるのは、ノンの「ン」が格助詞「を」の代わりをしているからであると考えることもできる。実際、牧村編（2004）の「ノン」の項においても、「もう行くノンやめときまっさ」という例文に「行くのをのヲが略される」という解説がある。しかし、当方言において、格助詞「を」の省略はノンの有無に関係なく起こることであり、ノンの「ン」が「を」の代わりをしているかどうかは断言できない。ノンの使用と助詞の省略は無関係ではないと思われるが、以上の理由から、本稿では基本的に触れない。

では、連体修飾節の述語が形容詞の過去形である文が作りにくいからということを考えてみたい。(28) と (29) は形容詞の過去形に準体助詞を後接させた例文だが、文自体に少し不自然な印象が拭えない。これは、寺村 (1984) や加藤 (2003) などで指摘されているように、連体修飾節においては、形容詞のテンス対立が解消し、主節のテンスに同化することがあるためである。

(32) 昨日｛激しい／*激しかった｝雨が降った。

例えば、(32) では、主節のテンスは過去だが、「雨」を修飾する形容詞「激しい」は過去形だと不適格になり、非過去形が使用される。一方、次のような場合は「激しかった」が用いられる。

(33) ｛*激しい／激しかった｝雨が、夕方やっと小降りになった。

これは、「激しかった」が表す時間が主節よりも以前のことであるからと言える。

これと同様のことは、ノンを主名詞としても起こる。

(34) ?あんなにおいしかったノンが 1 日でまずくなった。

(34) は (28) と同様に「おいしかった」にノンが後接する例だが、多少の不自然さは残るものの、不適格ではない。これは、(33) と同じように、「おいしかった」の表す時間が主節よりも前のことだからである。つまり、(28) や (29) においてノンが使えないのは、ノンの問題ではなく、形容詞の問題であり、そもそも自然な例文が少ないからと言える。

以上のように、準体用法であるという条件があれば、直前が過去形であってもノンは使える[9]。ただし、やはり (10) の原則が基本としてあるので、ンが最も自然であり、(30) や (31) のように、その意味でのノンの不自然さはある。とはいえ、ノンはンやノに比べて形式名詞としての性質が強く、準体用法に偏る傾向があり、それは分布の原則から外れるほどであると言える。中でも、(26) や (27) のような形容詞の非過去形に後接する場合は、撥音の直後ではないにもかかわらず、ンよりもノンのほうが使いやすい。その理由は定かではないが、ノンの形式名詞としての性質が強いことと関係していると思われる。

ただし、形容動詞および名詞に準体助詞が後接する場合、コピュラの連体形「ナ」に後接することになるが、この場合、ノもノンも使えない。

(35) 掃除機はもうちょっと静かな｛ン／*ノ／*ノン｝が欲しい。

(36) いつまでも元気な｛ン／*ノ／*ノン｝はええことや。

(35) と (36) では、どちらも準体助詞が「ナ」に後接しているが、いくら「もの」と解釈できても、ノンは使えない。これは、少し不自然というような程度の問題ではなく、間違いなく不適格である。その理由も明確ではないが、音韻的な条件が関係しているのではないかと考えられる。

以上、ノンは準体用法で好んで使用され、(10) の分布原則から外れることもあるということを述べた。

---

9) 大野 (1984:83) によると、直前の音が /a/ の場合、ノンは使われないが、若い女性はその限りではないという。

### 4.1.2. ノダ用法のノン

次は、ノダ用法におけるノンについて述べる。(22) に示したように、たとえ撥音の直後であっても、「ノンヤ」という形では使いにくい。

(37) あの人全然食べへん｛*ン／ノ／?ノン｝ヤ。　((22) 再掲)

これは、4.1.1 節で述べた、ノンは形式名詞としての性質が強いということの裏返しと考えられる。つまり、ノンは形式名詞として解釈されやすく、モダリティ形式であるノダの一部としては機能しにくいということである。

(38) これは昨日買ってきた｛ン／ノン｝ヤ。

例えば、(38) でンを使うと、準体用法としてもノダ用法としても解釈できるのに対して、ノンを使った場合、準体用法として解釈されるのが普通である[10)]。

以上のように、ノダ用法の「ノンヤ」が許容されにくいのは、コピュラが後接するという環境において、ノンが形式名詞と解釈されやすいためであると言える。しかし、ノダ用法であっても、ノンが使われることはある。

(39) どこ行く｛ン／*ノ／ノン｝？

(40) もう帰る｛ン／*ノ／ノン｝カ？

(39) は後に何も続かない場合、(40) は「カ」が続く場合であり、どちらも疑問文である。これらはいずれも直前が撥音ではないため、基本的にンを使うのだが、ノンも使える。これらに共通しているのは、ノダ用法であっても「ノンヤ」で言い切る形をとっていないことである。

では、なぜこれらの例において、ノダ用法でノンが使えるのだろうか。それは、これらのノンが準体用法ではなく、終助詞的に使われている[11)] からだと思われる[12)]。(39) や (40) のような疑問文でノンが使われやすいのもそのためである。

しかし、これらのノンが後接する動詞を過去形にすると、不適格になる。

(41) どこ行った｛ン／*ノ／*ノン｝？

(42) もう帰った｛ン／*ノ／*ノン｝カ？

このことは、4.1.1 節の (30) と (31) に示したように、ノンが過去形に後接しにくい[13)] ことと関係する。4.1.1 節では、ノンが後接しにくい過去形であっても、準体用法であれば許

---

10) ただし、準体用法の場合は「ヤツ」などの形式名詞を使うのが普通なので、ンでもノダ用法の解釈に傾きやすい。

11) ここでいう「終助詞的」とは、単に意味が終助詞的であるということだけを指しているのではない。そもそも、ノダ用法はモダリティに属すると考えられるため、意味的にはそれだけで「終助詞的」だが、ノダ用法の中でもノンにはコピュラが後接せず、基本的に活用しないことや、後述する「ノンナ」の振る舞い（コピュラの「ナ」ではなく「ヤ」に後接）などの形式的な面からも、ノダ用法におけるノンが「終助詞的」であると言える。

12) 広島方言においても、大阪方言と同様に、疑問文の文末に「ノン」が現れることがあり、灰谷 (2010) はこれを「ノ」が疑問、「ン」が確認のニュアンスをそれぞれ帯びると解釈しているが、本稿ではそのような解釈をとらない。(39) や (40) においてンとノンの間にそのような違いが感じられないからである。

13) 前の述語が過去形の場合、ノやノンよりもンに使用が偏るということは、野間 (2014) でも述べた。

容されるということを述べた。一方、(41) と (42) は準体用法ではないため、ノンの使用が許容されないのだと考えられる。

このことと関係があると考えられる表現として、WH 疑問文において用いられる、次のような「ノンナ」という表現がある。

(43) どこ行くノンナ。

(44) あの人誰やノンナ。

これらは WH 疑問文という形をとってはいるが、「わからないから教えてくれ」という純粋な問いかけだけではなく、反語的な含みも持つ。例えば、(43) は、遅い時間に聞き手がどこかへ行こうとしていて、それを話し手が止めようとするような場面で用いられる。(44) も、「あの人」がその場にいることに対して話し手が不満を抱いているような場面で発話される。

このような「ノンナ」は、(39) や (40) のようなノダ用法のノンとは、形式の面でも異なる。(44) からわかるように、名詞述語に「ノンナ」が後接する場合、コピュラの「ヤ」に後接する。当方言では、ノダ用法のンの場合、名詞述語の疑問文では、次のように「名詞＋ナン」となる。

(45) あの人誰ナン？

この「ナ」はコピュラ「ヤ」の連体形とみなせるものであり、この点において、ンとノンで接続のあり方が異なることがわかる。また、「ノンナ」の「ナ」は、「今日は寒いナ」のように使われる、共通語の「ね」に相当する「ナ」とは異なる。まず、「ね」相当の「ナ」は疑問文では使われない。また、名詞述語文においては「今日はええ天気ヤナ」のように、コピュラの「ヤ」に後接する。しかし、(46) (47) からわかるように、「ノンナ」は「*ノンヤナ」にはならない。また、(46) において「どこ行くンナ」のように「ノンナ」の代わりに「ンナ」を使うことも可能だが、やはり「*ンヤナ」とはならない[14]。

(46) どこ行く｛ン／*ンヤ／*ノ／*ノヤ／ノン／*ノンヤ／ネン｝ナ？

(47) あの人誰や｛*ン／*ンヤ／*ノ／*ノヤ／ノン／*ノンヤ／ネン｝ナ？

以上のように、「ノンナ」は、単純に「ノダ相当形式＋終助詞」と分析することはできない。さらに、(46) (47) に示したように、「ノンナ」は「ネンナ」に置き換えることができる。この「ネン」は、当方言におけるノダ相当形式の 1 つで、形式面においても意味面においても終助詞に近い性質を持っている（野間 2013）。例えば、(47) のように名詞述語に後接する場合に、コピュラの連体形「ナ」ではなく終止形「ヤ」に後接するというのは、終助詞的な性質の 1 つだが、これは「ノンナ」と「ネンナ」に共通することである。以上のようなことから、「ノンナ」はこの「ネンナ」をもとにして作られ、ノダ用法で用いられる終助詞的なノンはこれをもとにしたのではないかと考えられる。もちろん、これはあくまで仮説であり、実証的な研究が必要ではあるが、「ノンヤ」を除くノダ用法のノンが、形式名詞ではなく終助詞的に使用されるということと無関係ではないと思われる。

---

14) (47) で「ンナ」が使えないのは、既に述べたように、コピュラ「ヤ」にンが後接できないためである。

以上、ノダ用法におけるノンは、準体用法とは違って終助詞的な使われ方をしているということを明らかにした。ただし、「ノンヤ」については、準体用法と解釈されるおそれがあるため、ほとんど使われない。また、過去形に後接しにくいという性質は準体用法と共通しており、文末で使われる場合であっても過去形には後接できないということも述べた。

しかし、次のように終助詞とは言いがたい位置に生起する場合にもノンは使える。

(48) 行きたくて行く｛ン／*ノ／ノン｝チャウ。

(48) は「チャウ（チガウ)」を後接させて否定の形をとっている例だが、ここでもノンは使える。このような場合になぜノンが使えるのか明らかではないが、(48) のような場合は「ノンヤ」とは違って準体用法として解釈されるおそれがなく、「その電車は乗るノンチャウ」のように、準体用法と解釈されてもノダ用法と解釈されても意味に大きく違いはないということも関係していると考えられる。

### 4.2. 接続助詞に関するもの

次に、ノデやノニといった接続助詞の用法について述べる。これらの場合、準体助詞ン・ノ・ノンは (10) の原則どおりには分布しない。以下、ノデの場合とノニの場合に分けて記述する。

#### 4.2.1. ノデ

ノデの場合、ンとノは使われるが、ノンは使われない。つまり、「ンデ」や「ノデ」という形はあるが、「ノンデ」という形にはならない。なお、ンとノは (10) の原則どおり、直前が撥音かどうかで決まる。

(49) 用事ある｛ン／?ノ[15]／*ノン｝デ帰ります。

(50) 用事あん｛*ン／ノ／*ノン｝デ帰ります。

(49) は動詞が非音便形の場合、(50) は音便形の場合である。ンとノンは原則どおり使用されるが、ノンはどちらの場合も使えない。これは、「ノンデ」だと「形式名詞＋デ（格助詞もしくは中止形)」と解釈されるためだろう。

(51) こっちは赤いノンで、あっちは青いノンやけど、どっちする？

(51) の下線部は「ノンデ」となっているが、これは形式名詞の「ノン」に「デ」(コピュラの中止形) がついたものである。

#### 4.2.2. ノニ

ノニの場合、直前の音に関係なく、ンとノンは使えず、ノのみが使われる。

(52) 洗濯物干してる｛*ン／ノ／*ノン｝ニ雨降ってきた。

(53) 洗濯物干してん｛*ン／ノ／*ノン｝ニ雨降ってきた。

(52) は直前が非音便形、(53) は音便形の例だが、どちらの場合もノしか使えない。これ

15) ここでノに「*」がつかないのは、「ノデ」という形式が高いスタイルで使用されることが関係している。

は、大阪方言における「ノニ」という接続助詞が、「準体助詞＋ニ」からできたものではなく、「ノニ」という形のまま外から取り入れた[16] からであると思われる。ノデの場合と同様に、「ンニ」「ノンニ」という形は、形式名詞に助詞「ニ」が後接したものだと解釈される。

（54）誰か来た｛ン／ノン｝に気がついた。

（54）では、ン・ノンに「に」が後接しているが、これは形式名詞に助詞が後接しているだけである。

## 5.　体系内におけるノンの位置づけと変化

ここまで、ノンを中心に、(10) の分布規則には当てはまらない例をみてきた。本節では、ノンがこのような分布を示す意味について、体系内におけるノンの位置づけの変化という点から考えてみたい。

4 節で述べたノンの分布をまとめると以下のようになる。

① どの用法であっても、過去形に後接しにくいという性質は共通している。

② 準体用法であれば撥音の直後でなくてもノンが使えることがある。特に、形容詞の非過去形とは相性がよく、ンよりもノンのほうが使いやすい。また、多少不自然にはなるが、過去形にも後接できる。しかし、コピュラの連体形「ナ」には後接できない。

③ ノダ用法では、形式名詞ではなく、終助詞的な使われ方をする。そのため、形式名詞として解釈されるおそれのある「ノンヤ」はあまり使われない。特に、WH 疑問文のみで使用される「ノンナ」は、形式の面でも終助詞的な性質を示す。

④ 接続助詞の用法ではノンは使われない。「ノンデ」「ノンニ」という形はありえるが、どちらの場合もノンは形式名詞と解釈される。

これらのことは、ノンが形式名詞として解釈されやすいことから説明できる。大阪方言の準体助詞ン・ノ・ノンの中でも、ノンは相対的に形式名詞として、すなわち準体用法として解釈されやすい。①のように準体用法では撥音の直後でなくてもノンが使えるのは、形式名詞としての性質があるからである。一方、②のようなノダ用法では、形式名詞と解釈されない場合に終助詞的な使われ方をする。

このように、同じ体系内の複数の準体助詞の中で特定の形式が形式名詞として解釈されやすいという現象は、熊本市方言にも見られる。坂井（2012）によると、熊本市方言には、「ツ」「ト」という 2 種類の準体助詞があり、「ツ」＝《モノ・ヒト》、「ト」＝《コトガラ》という分布を示すという。そして、「ツ」は本稿で言うノダや接続助詞の用法では使えない。このことは、具体物を指し表すか否かという名詞性（指示性）の違いでとらえられるという。大阪方言のノンはモノ準体とコト準体を区別しないが、ノンは他の準体助詞に比べて名詞性が高いと言える。そして、細かい状況の違いはあるが、ノンがノダや接続助詞の用法に使われない（使われにくい）ということも、名詞性の高さから説明できる。

---

16）おそらく共通語から取り入れられたと考えられるが、大阪方言において「ノニ」がいつ頃から使用されるようになったかについては未調査である。

以上のように、モノ・ヒトとコトガラの区別はしていないが、大阪方言におけるノンの位置づけは、熊本市方言の「ツ」によく似ていることがわかる。また、その内実は異なるが、接続に関して制約があるという点も共通している。熊本市方言の「ツ」は動詞連体形に後接できず、過去形および形容詞に後接する場合は「ツ」が使えるという。

では、なぜこのような制約があるのだろうか。この問いに対する明確な答えを現段階では持ちあわせていないが、ここでは、ノンの変化という点から考えてみたい。

本稿では、大阪方言若年層話者である筆者の内省をもとに記述を進めてきた。しかし、筆者の体系は現在の高年層話者や、それより上の世代の体系と異なる。例えば、4.1.2 節で述べたように、ノダ用法においては、「ノンヤ」という形で言い切るのは非常に不自然である。しかし、「ノンヤ」という形は各種資料や山本（1962）のような先行研究にも見られる。

では、このような体系の違いはどのようにとらえられるだろうか。本稿ではこの違いを、汎用的な準体助詞から名詞性の高い形式名詞へのノンの変化ととらえたい。つまり、かつてはノダ用法でもノンを使っていたが、それが次第にノンに形式名詞としての性格がつきはじめ、ンやノと区別されるようになってきた。そして、それに伴って「ノンヤ」も使われなくなっていったのだと考えられる[17)]。しかし、ノダ用法でも、主に文末においてはノンが終助詞的に使われる。この点は、熊本市方言と異なる点であり、その違いをもたらす要因は何なのかという点で非常に興味深い。以上のようなノンの位置づけの変化は、大阪方言における準体助詞の変化、特にノダ用法における文法化（野間 2013）と密接な関係にあると考えられる。今後、さらに考察を重ねていきたい。

## 6. まとめ

本稿では、大阪方言の準体助詞ン・ノ・ノンの分布について記述した。基本的な分布は、ンを基本とし、撥音の直後のみノとノンになるというものだが、ノンはそれだけでは説明できない以下のような分布を示す。

① どの用法であっても、過去形に後接しにくいという性質は共通している。

② 準体用法であれば撥音の直後でなくてもノンが使えることがある。特に、形容詞の非過去形とは相性がよく、ンよりもノンのほうが使いやすい。また、多少不自然にはなるが、過去形にも後接できる。しかし、コピュラの連体形「ナ」には後接できない。

③ ノダ用法では、形式名詞ではなく、終助詞的な使われ方をする。そのため、形式名詞として解釈されるおそれのある「ノンヤ」はあまり使われない。特に、WH 疑問文のみで使用される「ノンナ」は、形式の面でも終助詞的な性質を示す。

④ 接続助詞の用法ではノンは使われない。「ノンデ」「ノンニ」という形はありえるが、どちらの場合もノンは形式名詞と解釈される。

これらはノンが他の 2 形式よりも形式名詞としての性質が強いということから説明できる

17）「ネン」に対して「ンヤ」や「ノンヤ」の機能が縮小されつつある（野間 2013）こととも関係するかもしれない。このことは稿を改めて検討したい。

一方で、終助詞的用法も有しているという点で、単純に形式名詞化しているとは言えない。

しかし、残した問題も多い。例えば、ノンは接続する述語の種類に制約があったり（過去形に後接しにくい）傾向があったりする（形容詞の非過去形にはノンがつきやすい）が、なぜそのような傾向があるのかはまだ明らかでない。また、ノダ疑問文の文末におけるノンを「終助詞的に使われている」としたが、具体的にどのような機能を持っているのかは明らかにできなかった。以上のような問題は今後稿を改めて論じたい。

また、本稿では、ノンの位置づけを変化という視点で解釈しているが、その妥当性を検証するために、量的な分析をする必要があるだろう。現在の体系を記述するにしても、筆者1人の中でもゆれることがあるので、やはり量的な研究は必要だろう。

以上のように、積み残した問題は多いが、本稿では、大阪方言の準体助詞の体系を記述し、ノンが相対的に高い名詞性を持つということを明らかにした。本稿は、上で述べた種々の問題の出発点として位置づけられるべきと考える。

**【参考文献】**

大野小百合（1983）「現代方言における連体格助詞と準体助詞」『日本学報』2，pp.27-66，大阪大学文学部日本学研究室.

――――――（1984）「現代日本語方言における種々の準体助詞の成立について―現代方言における連体格助詞と準体助詞＜その 2＞―」『日本学報』3，pp.63-84，大阪大学文学部日本学研究室.

加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.

工藤真由美（1985）「ノ、コトの使い分けと動詞の種類」『国文学　解釈と鑑賞』50-3，pp.45-52，至文堂.

坂井美日（2012）「現代熊本市方言の準体助詞―「ツ」と「ト」の違いについて―」『阪大社会言語学研究ノート』10，pp.30-47，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

田野村忠温（1990）『現代日本語の文法Ⅰ　「のだ」の意味と用法』和泉書院.

坪本篤朗（1984）「文のなかに文を埋めるときコトとノはどこが違うのか」『国文学　解釈と教材の研究』29-6，pp.87-92，学燈社.

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.

野田春美（1997）『日本語研究叢書 9　「の（だ）」の機能』くろしお出版.

野間純平（2013）「大阪方言におけるノダ相当表現―ノヤからネンへの変遷に注目して―」『阪大日本語研究』25，pp.53-73，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

――――――（2014）「近畿方言におけるネン・テンの成立―昔話資料を手がかりに―」『阪大日本語研究』26，pp.51-69，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

灰谷謙二（2010）「広島方言における文末詞『ノン』」『尾道大学日本文学論叢』6，pp.27-37.

橋本修（1990）「補文標識『の』『こと』の分布に関わる意味規則」『国語学』163，pp.1-12（左），国語学会.

彦坂佳宣（2006）「準体助詞の全国分布とその成立経緯」『日本語の研究』2-4，pp.61-75，日本語学会.

牧村史陽編（2004）『新版　大阪ことば事典』講談社.
山口尭二（2000）『構文史論考』和泉書院.
山本俊治（1962）「大阪方言『ネン』」『国文学攷』27，pp.25-29，広島文理科大学国語国文学会.

---

のま　じゅんぺい（大阪大学大学院生）
nomajumpei@yahoo.co.jp